長野市の埋蔵文化財第71集

浅川扇状地遺跡群

FUTA-TSU-MIYA SITE

二ツ宮遺跡(2)

中部電力吉田柏原線仮設鉄塔建設工事にともなう

埋蔵文化財発掘調査報告書

浅川扇状地遺跡群

YOSHI-DA MACHI-HIGASHI SITE

吉田町東遺跡

吉田住宅分譲地造成工事にともなう

埋蔵文化財発掘調査報告書

1995.3

長野市教育委員会

序

平成５年３月、「高速道路」長野自動車道・上信越自動車道の開通は長野市にとって高速交通網社会の到来を感じさせる出来事でありました。また1998年長野冬季オリンピック開催に向けての施設建設や従来停滞していた道路整備などにともなう工事も着々と進み、長野市の景観も徐々に変わりつつあります。しかしながら生活の向上を求める陰に地中に埋もれている貴重な歴史、埋蔵文化財がこれら開発行為によって犠牲となっていることも忘れてはならないでしょう。私たちはその開発行為により失われてしまう埋蔵文化財の保護・保存・公開という大きな責務を担っております。

本書に所収しております２遺跡は、飯綱山を水源とする浅川が形成した扇状地上に立地している、広大な面積を有する浅川扇状地遺跡群に属しており、長野市を代表する集落遺跡であります。今回の調査範囲は非常に狭いものでありましたが貴重な遺構・遺物が出土しています。ここに長野市の埋蔵文化財第71集として刊行いたします本書には、その成果が詳しく掲載されております。連綿と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にしかすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました中部電力株式会社、マツダ株式会社、北信土建株式会社の関係諸氏、発掘作業に携わっていただきました地元発掘作業員の皆様、また報告書刊行に至るまでご支援ご指導いただきました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げ、本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

平成７年３月

長野市教育委員会
教育長　滝澤　忠男

例　言

1　本書は、民間開発事業「中部電力吉田柏原線仮設鉄塔建設工事」および「吉田住宅分譲地造成工事」に伴い、平成６年度に実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査事業は、委託者　中部電力株式会社　長野支店長　田中重信　および委託者　マツダ株式会社　代表取締役　松田次郎　と、受託者　長野市長 塚田 佐　との埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づき、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター担当）が実施した。

3　発掘調査地籍は、長野県長野市大字稲田字北原1050番地および長野県長野市吉田３丁目998番地他であり、それぞれの保護対象面積は81㎡および233㎡である。

4　本書の作成は飯島が担当した。整理作業は各調査員が分担しこれを補助した。

5　発掘調査の実施に際し、事業委託者である中部電力株式会社長野支店、およびマツダ株式会社におかれては埋蔵文化財に対して深いご理解をいただき、絶大なご協力を賜った。また現場調査時、さらに整理調査において下記の方々・機関より有益なご指導・ご助言をいただいた。深甚なる謝意を表し銘記するものである。

二ツ宮遺跡(2)　　中部電力株式会社　長野支店用地部用地課　西澤富雄・大厩朋幸・岩倉俊輔

吉田町東遺跡　　マツダ株式会社、保科土木設計監理事務所、長田長治、長野市立博物館　山口　明

6　調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。

なお、出土遺物の注記記号は二ツ宮遺跡「AFT」、吉田町東遺跡「AYMH」と表記してある。

凡　例

1　本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。

2　遺跡周辺の環境等は紙数の都合上割愛した。詳細については当教育委員会既刊の報告書、長野市の埋蔵文化財第22集『長野吉田高校グランド遺跡』や、長野市の埋蔵文化財第47集『浅川扇状地遺跡群　二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』等を参照されたい。

3　地図等に記載した方位は真北、また実測図等に掲載した方位は全て座標北を表している。なお、磁北は真北より西へ約６°40'の偏差がある。

4　遺構の測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（東経138°30′00″、北緯36°00′00″）の座標値と日本水準原点の標高を基準とし、㈲写真測図研究所の開発したコーディックシステムを援用するため同所に委託した。

5　検出した遺構の略記号については、奈良国立文化財研究所作成の記号を基に、仮に下記のとおり作成した。

SA…竪穴住居跡、SD…溝跡・河川跡、SE…井戸跡、SK…土坑、SP…小穴、

SX…性格不明遺構、Tr…トレンチ、

6　遺物に関しては原寸にて実測図を作成し、本書では基本的に土器実測図１：４、石器・石製品１：４、土器拓影１：３、土製品・ミニチュア土器１：３に統一してある。

7　土器の実測図において、土器の種類や黒色処理・赤色塗彩等は網掛けによって下記のとおり表記した。

……弥生土器、土師器など

……赤色塗彩の範囲、須恵器など

……灰釉陶器

……その他陶磁器

……内黒処理の範囲

調 査 体 制

両調査は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター担当）の直轄事業として実施し、その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会		教育長	滝沢 忠男	
調査機関	長野市埋蔵文化財センター		所長	荒井 和雄	
			主幹兼所長補佐	鈴木 貞男	
			所長補佐	山中 武徳	
			所長補佐	矢口 忠良	
	庶務係	係長	山中武徳		
		事務員	青木厚子		
	調査係	係長	矢口忠良（調査担当者）	専門員	中殿章子（調査員）
		主査	青木和明	専門員	笠井敦子
		主事	千野 浩	専門員	山田美弥子
		主事	飯島哲也（主任調査員）	専門員	寺島孝典
		主事	風間栄一	専門員	西沢真弓
		主事	小林和子	専門員	田村直也（調査員）
		専門主事	太田重成	専門員	田中由美子
		専門主事	清水 武		

調査員　矢口栄子、青木善子

発掘参加者　二ツ宮遺跡(2)　金子ゆき、神頭幸雄、佐藤ひで子、美谷島昇、吉沢トシ子

吉田町東遺跡　金子ゆき、北村幸恵、小林紀代美、小林三郎、佐藤ひで子、鈴木友江、成田敦子、新津三千子、吉沢トシ子

整理参加者　池田見紀、岡沢治子、金子紅実子、小林まゆ佳、徳成奈於子、西尾千枝、向山純子、武藤信子

遺構測量委託　有限会社写真測図研究所　代表取締役　杉本幸治（〒380　長野市鶴賀678番地）

写真１
吉田町東遺跡
発掘調査参加者

目　次

序　文、例言・凡例、調査体制、調査地位置図、目　次

浅川扇状地遺跡群　二ツ宮遺跡(2)

Ⅰ　調査経過……2
　1　調査に至る経過……2
　2　調査日誌抄……2
Ⅱ　調査成果……3
　1　調査区の位置と地形……3
　2　発掘調査歴……3
　3　検出遺構……5
　・　井戸状性格不明遺構……6
　4　出土遺物……7
Ⅲ　小　結……8

浅川扇状地遺跡群　吉田町東遺跡

Ⅰ　調査経過……10
　1　調査に至る経過……10
　2　調査日誌抄……10
Ⅱ　調査成果……11
　1　調査区の位置と地形……11
　2　吉田地区の発掘調査歴……11
　3　遺構と遺物……13
　(1)　竪穴住居跡……14
　(2)　大溝跡……16
　(3)　縄文時代の遺物……18
Ⅲ　小　結……19

報告書抄録、奥　付

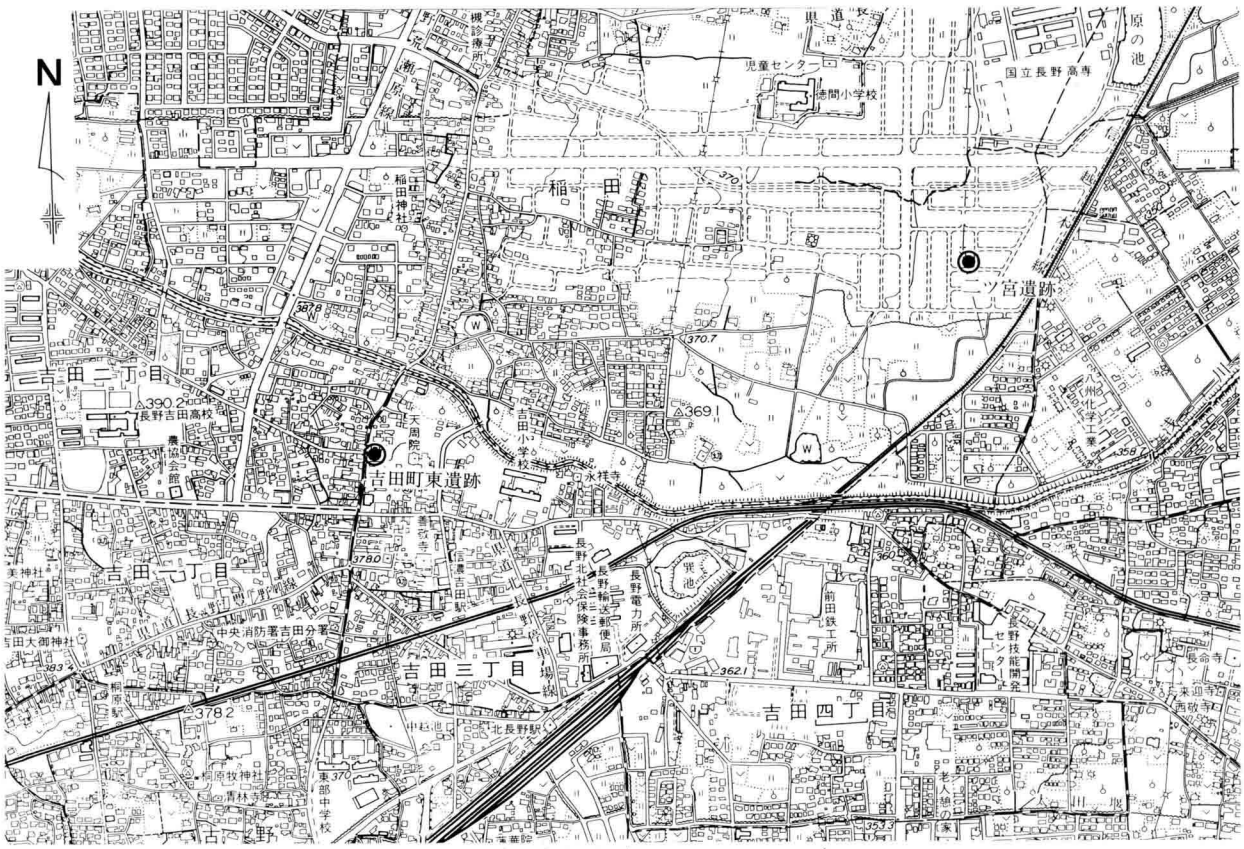

図1　調査地位置図（Scale＝1：15,000）

挿　図　目　次

浅川扇状地遺跡群　二ッ宮遺跡(２)

図１　調査地位置図 ･････････････････ １
図２　調査区位置図 ･････････････････ ３
図３　調査区および周辺遺構分布図･･････ ４
図４　調査区全体測量図 ･････････････ ５
図５　ＳＸ１実測図 ･････････････････ ６
図６　二ッ宮遺跡(２)出土土器実測図････ ７

浅川扇状地遺跡群　二ッ宮遺跡(２)

図７　調査区位置図 ･････････････････ 11
図８　調査地周辺地形図旧字図･･････････ 12
図９　調査区位置図 ･････････････････ 12
図１０　調査区全体測量 ･････････････ 13
図１１　ＳＡ１実測図 ･･････････････ 14
図１２　ＳＡ１出土遺物実測図･･････････ 15
図１３　ＳＡ３実測図 ･･････････････ 15
図１４　ＳＡ４実測図 ･･････････････ 16
図１５　ＳＡ４出土遺物実測図･･････････ 16
図１６　ＳＤ１出土遺物実測図･･････････ 17
図１７　ＳＤ３出土遺物実測図･･････････ 17
図１８　吉田町東遺跡出土縄文土器拓影････ 18

写　真　目　次

浅川扇状地遺跡群　二ッ宮遺跡(２)

写真１　吉田町東遺跡発掘調査参加者
写真２　試掘坑土層断面 ･････････････ ２
写真３　４月１８日重機掘削 ･････････ ２
写真４　４月１９日　ＳＤ等掘下げ･････ ２
写真５　４月２０日　ＳＤ２堀下げ･････ ２
写真６　ＳＸ１全景(北から) ･････････ ６
写真７　ＳＸ１石組み ･･････････････ ６
写真８　出土土器写真 ･･････････････ ７
写真９　調査区全景(北西から) ･･････ ８

浅川扇状地遺跡群　二ッ宮遺跡(２)

写真１０　作業風景(１) ･････････････ 10
写真１１　作業風景(２) ･････････････ 10
写真１２　作業風景(３) ･････････････ 10
写真１３　実測作業風景 ･････････････ 10
写真１４　調査区全景(西から)･･････････ 13
写真１５　遺物検出状況 ･････････････ 14
写真１６　ＳＡ１全景 ･･････････････ 14
写真１７　出土遺物写真 ･････････････ 14
写真１８　ＳＡ３全景 ･･････････････ 15
写真１９　ＳＡ３･４切合い状況･･････････ 16
写真２０　ＳＡ４全景 ･･････････････ 16
写真２１　調査区全景(西から)･･････････ 19
写真２２　調査区全景(東から)･･････････ 19

浅川扇状地遺跡群

FUTA－TSU－MIYA SITE

二ツ宮遺跡(2)

中部電力吉田柏原線仮設鉄塔建設工事にともなう

埋蔵文化財発掘調査報告書

1995.3

長野市教育委員会

Ⅰ　調査経過

1　調査に至る経過

二ツ宮遺跡の所在する長野市稲田・徳間一帯は、もともと水田・畑作地帯であったが、昭和61年に計画された稲田徳間土地区画整理事業を契機として、住宅・大規模店舗が軒を並べる郊外型住宅街へと変貌しつつある。このような情勢のなか、北陸新幹線建設にともない高圧電線の嵩上げが必須となったことから、新幹線予定地の両側の鉄塔を建替える工事が中部電力より計画された。旧鉄塔を建替える間の仮設鉄塔予定地について、中部電力の依頼により平成６年４月７日試掘をともなう確認調査を実施したところ、良好な埋蔵文化財の包蔵を確認した。中部電力との協議の中で、仮設とはいえ鉄塔の建設となると埋蔵文化財への影響は否めず、記録保存を目的とした発掘調査を実施することになった。

2　調査日誌抄

平成６年４月18日　快晴（調査員３名、作業員５名）
　重機による表土剥ぎ作業。器材搬入。テント設営。
　午後より遺構検出作業。

４月19日　晴れ（調査員３名、作業員５名）
　SD等遺構掘り下げ作業。

４月20日　晴れ（調査員３名、作業員５名）
　遺構掘り下げ作業。SX１写真撮影。

４月21日　晴れ（調査員３名、作業員５名）
　調査区全景写真撮影。コーディックシステム測量。
　器材撤収作業。

４月22日　快晴（調査員３名、作業員０名）
　SX１実測。測量図結線。
　本日をもって現場における全ての作業を終了する。

調査期間	平成６年４月18日～４月22日
実質調査日数	５日間
延作業員数	20人
起因事業面積	81㎡（保護対象面積）
実質調査面積	80㎡

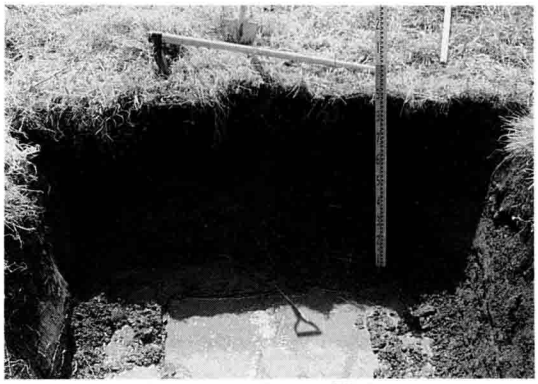

写真２　試掘坑土層断面

写真３　４月18日重機掘削

写真４　４月19日　SD等掘下げ

写真５　４月20日　SD２掘下げ

II　調査成果

1　調査区の位置と地形

飯綱山を水源とする浅川は、中曽根集落のある山間部を侵食しながら流下し、通称「浅川原口」を起点として長野盆地内に流入し、東南方向へなだらかに傾斜する典型的な大規模扇状地を形成する。調査区の所在する稲田・徳間の両地区の間は、この浅川扇状地の扇端部分にあたり、扇状地の特性を生かした畑地や果樹園が営まれるが、これより東はJR信越線付近で低位置となり水田耕作地帯となる。しかし昭和61年に計画された事業面積約45haにおよぶ「長野市稲田徳間土地区画整理事業」により大規模な造成がなされ、現在ではその造成区画の高低差でしか、旧地形を見ることはできなくなっている。

2　発掘調査歴

浅川扇状地のほぼ全域が周知の埋蔵文化財包蔵地である「浅川扇状地遺跡群(遺跡番号：長野市A－①)」の範囲内となっており、調査区が含まれる二ツ宮遺跡もその構成遺跡の一つである。二ツ宮遺跡の本格的調査は、前述の区画整理事業にともなう緊急発掘調査が箸付となり、昭和63年の第１次調査から平成２年の第３次調査まで継続実施された。詳細は同報告書に委ねるが、弥生時代中期後半から平安時代までの大規模複合集落跡であり、中近世遺物も出土している。特筆すべきは軒平瓦や瓦塔、鴟尾片等の宗教関連遺物の出土であり、これらは９世紀代における古代寺院（村落内寺院？）存在の可能性を示唆するものであるという。今回の調査区に隣接するFM３・４区については、遺構のつながりが予想でき得る地点である。FM３・４区の遺構は時期の特定できないものが多いが、３区東端の弥生時代中期後半期の住居跡、外来系土器が出土しているという古墳時代前期の４区20号溝跡、古墳時代後期の３区２号住居跡、奈良時代の３区１号・21号・４区９号住居跡等がある。時期不明ながら４区10・13号溝跡等が当調査区内に続くものと思われ、関連遺構の検出に努めた。さらに調査区と同一区画内には旧北国街道の通過点である市指定史跡の稲積一里塚が存在することから街道遺構等の検出をも期待した。

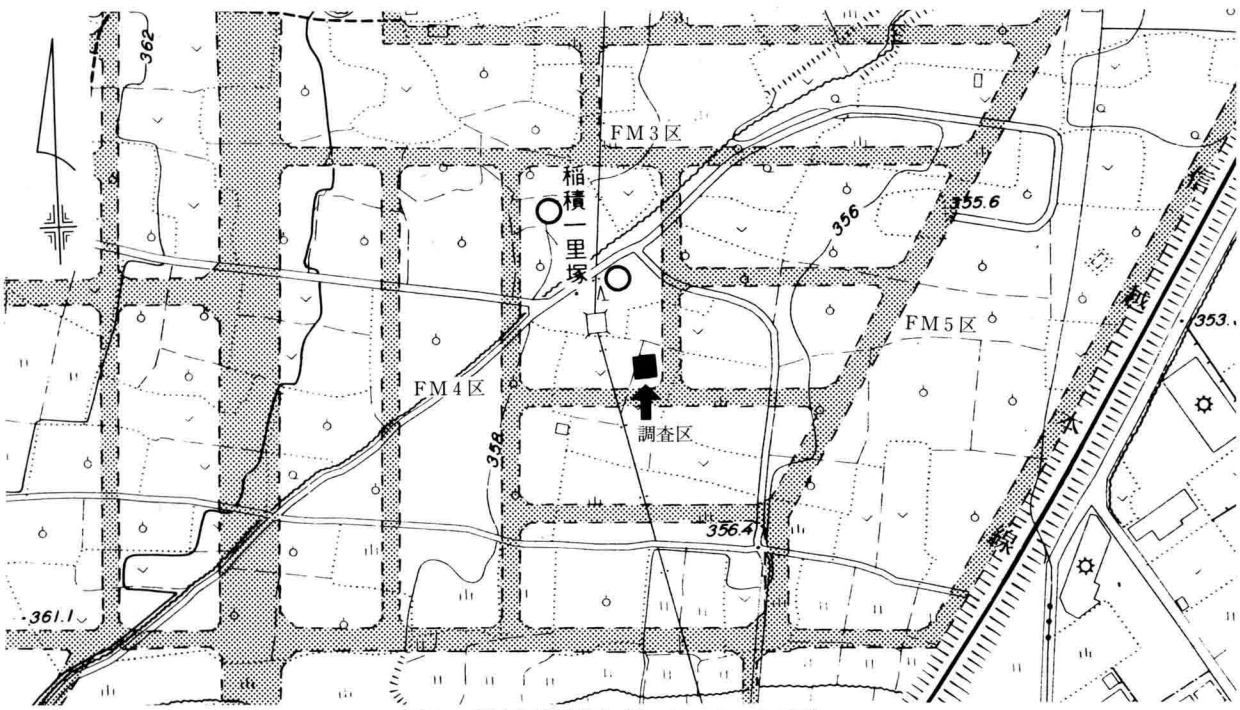

図２　調査区位置図（Scale＝１：2,500）

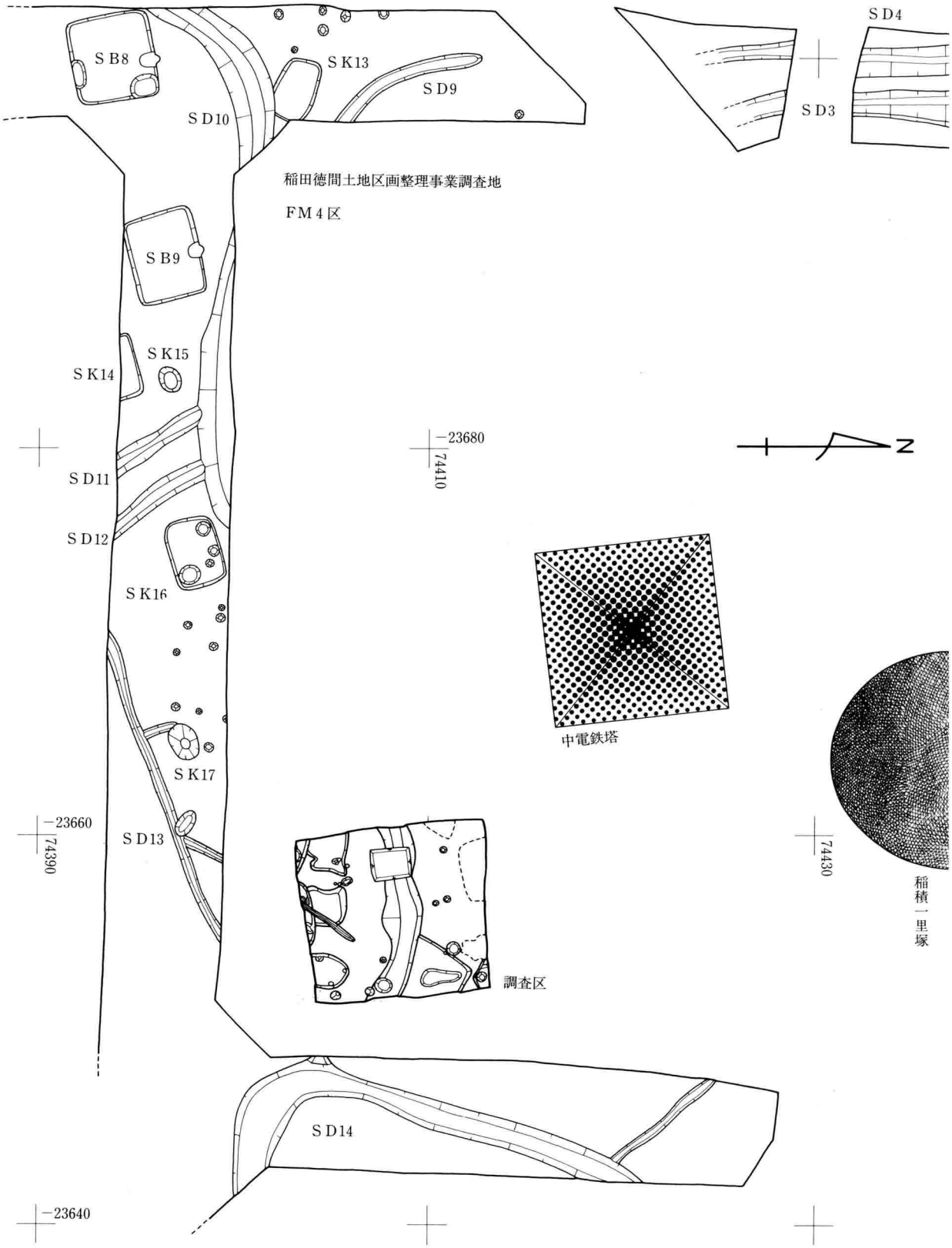

図3　調査区および周辺遺構（FM4区）分布図（Scale＝1：300）

3 検 出 遺 構

確認調査（試掘）結果を基に遺構検出面を設定し、重機（バックホー）にて地表下約40㎝、標高356.20m付近まで表土を掘削した。試掘結果によればこれより下層は砂礫層となり、埋蔵文化財の包蔵は認められない。湧水レベルは355.80m付近で、砂礫層上層の堆積の薄さとともに扇状地扇端部の地形を物語っている。

現地表より浅いことを反映してか現代の所産と思われる攪乱が多く、検出した遺構は不明瞭のものが多い。竪穴住居跡１軒、溝跡２条、土坑７基、井戸状性格不明遺構１基、性格不明遺構１基、小穴等となっている。特にSX２は、当初竪穴住居跡（SA１）として掘り下げたもののの、遺物の出土がないうえ床面の状態が均一でないことから性格不明遺構とし、SA１は欠番となっている。調査区内南端のSA２はその一部を検出したにすぎず、

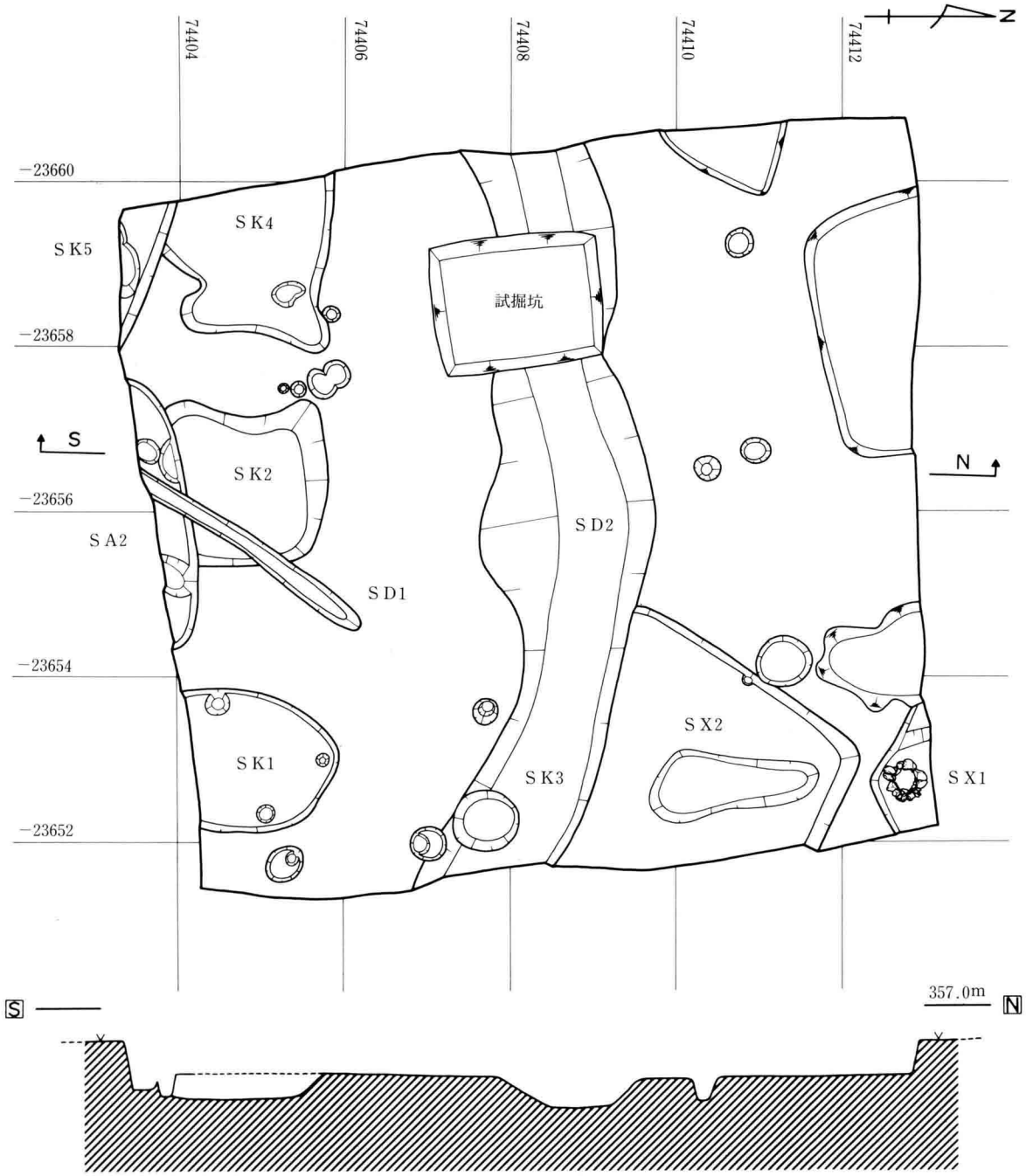

図４　調査区全体測量図（Scale＝１：80）

出土遺物も僅少かつ後世の破片が多く明確でないが、平面形態から弥生時代後期～古墳時代初頭と考えられる。SD１は出土遺物がなく時期を特定できないが、FM４区SD13から派生する溝に接続するものと考えられる。SD２は検出面における幅が約140cmと比較的大きいことから、FM４区SD14との関連が考えられよう。
この他、土坑は出土遺物より古墳時代後期～奈良時代の所産と考えられる。

井戸状性格不明遺構（SX１）

調査区の北東隅にて検出した土坑状の掘込みである。多くは調査区外となりその規模は不明であるが、おそらく竪穴住居跡のように大きな遺構ではないように思われる。遺構内に井戸状石組みが検出された。直径は内寸で

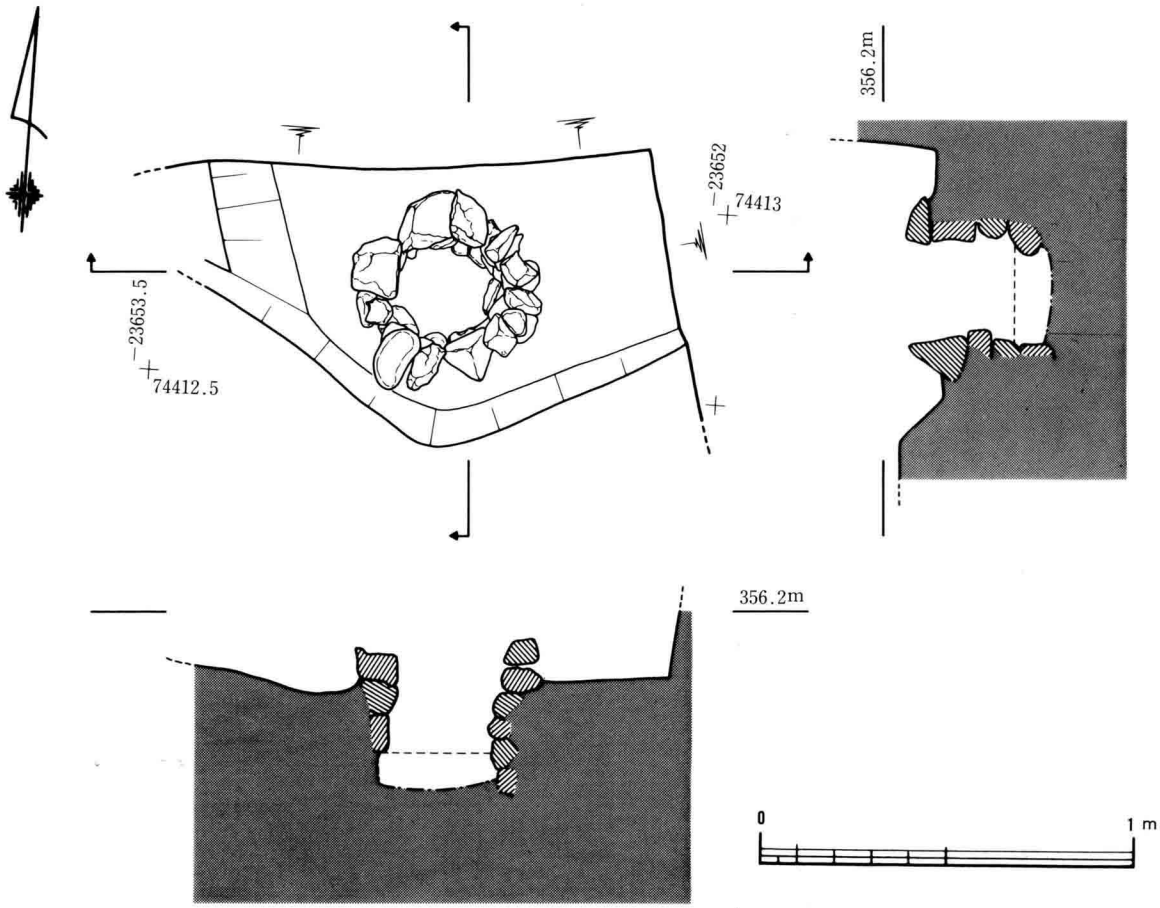

図５　SX１実測図（Scale＝１：20）

写真６　SX１全景（北から）

写真７　SX１石組

約25cmを測る円形の石組みで、拳大から幼児頭大の川原転石と凝灰岩系の山石を使用している。石組みは最大5段、平均4段で約40cmの深さまで積まれており、その下層は砂礫層となる。最上段は比較的小さめの石材で細かく小口積みされているのに対し、2段目以降は大きめの石材を広口積みに配し内面を調整している。なお、井戸状遺構の内部からの遺物の出土はなかったが、外側近辺より須恵器片［図6・9、10］が出土しており、おそらく奈良時代の遺構であろう。FM4区の17号土坑に近似した遺構と思われる。

4 出土遺物

調査区全般出土遺物量は僅少で、それも古墳時代中期～奈良時代の所産のものが主体である。図6には出土地点を付記してあるが、埋土上層など混入品が多く遺構の時期を特定できる土器片は少ない。須恵器の甕体部破片のタタキ調整には原体の細かな平行タタキ、大きな平行タタキ、格子状の平行タタキと3種類が確認できる。同様に内面調整も原体の細かなタタキオサエ（青海波文）、大きなタタキオサエ、無文オサエと3種ある。

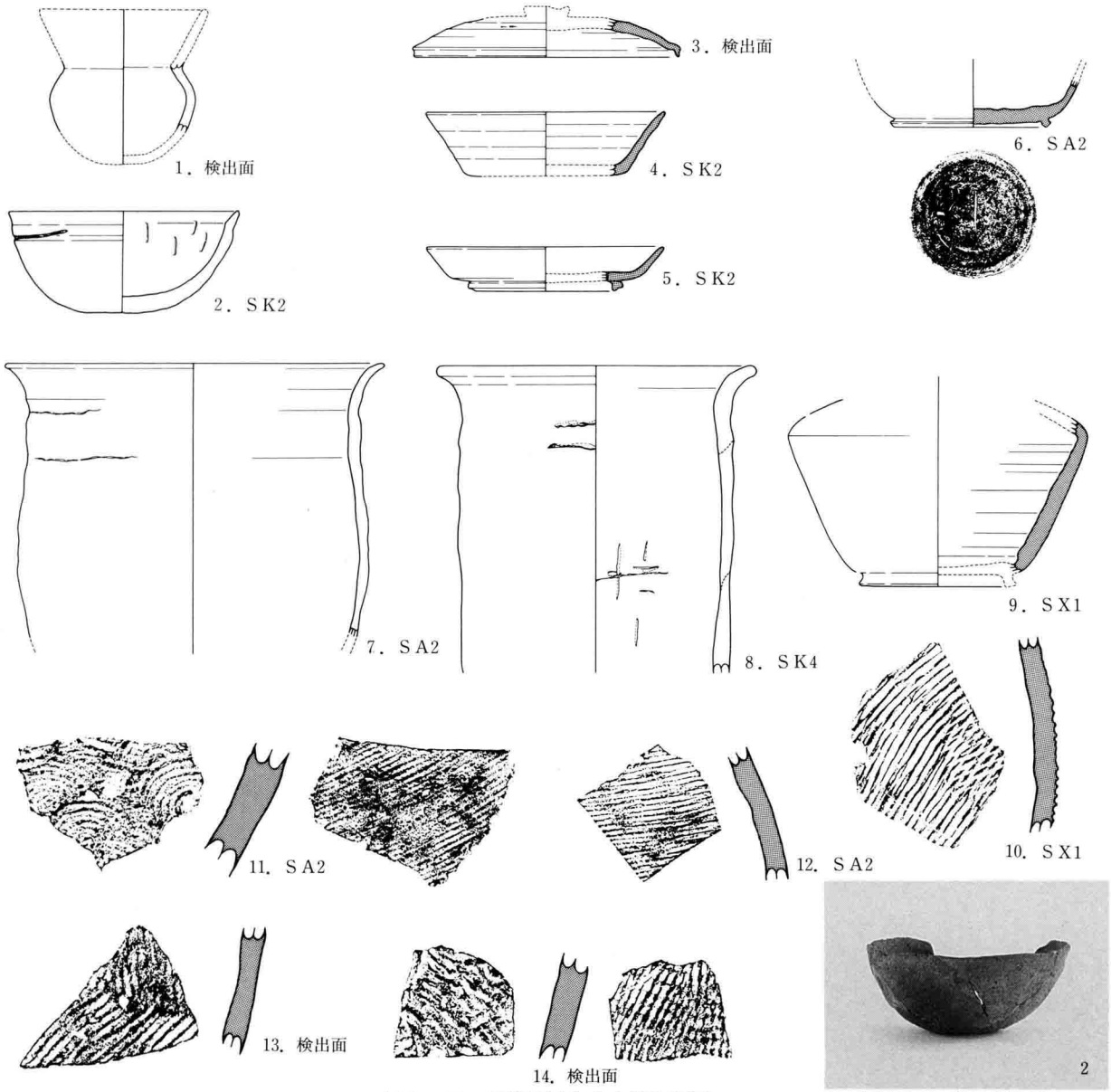

図6　二ッ宮遺跡(2)出土土器実測図
（Scale＝1：4、10～14は1：3）

写真8　出土土器写真

Ⅲ　小　結

今次調査において検出した遺構は、竪穴住居跡１軒、溝跡２条、土坑７基、井戸状性格不明遺構１基、性格不明遺構１基、小穴等である。出土遺物はきわめて僅少ながら古墳時代中期～奈良時代が主体である。

調査区は区画整理地点のFM４区内に位置しており、奈良時代の遺構が主体となる点など関連がうかがえる。特にSD１・２はそれぞれFM４区のSD13・14に接続する可能性が大きく、出土量が少ないながらも遺物も時期的に反故をきたさない。またSX１の井戸状性格不明遺構も、調査区の南西にあるFM４区SK17土坑に類似しており、一連の遺構である可能性が高い。弥生時代中期後半から平安時代にかけての集落域推移については、近接するFM３・５区との関連、ひいては二ツ宮遺跡（FM区）全体で考える必要がある。弥生時代の遺構は遺跡北東端（FM３・５区）に限定され、居住施設遺構はないものの古墳時代前期は遺跡南西に点在している。古墳時代中期は南西（１・２区）と北東（５区）に集落が形成される。この住居跡にはカマドが設置されず、善光寺平におけるカマド導入直前段階の集落といえよう。後期では遺跡西半（１～３区）にかけて比較的広範囲に展開していたようである。奈良時代には遺跡のほぼ全域に分布するが密度は希薄である。平安時代は遺跡北半から西半にかけて密集する。さて近世に下るが、調査区と同一区画内の稲積一里塚について、旧北国（往環）街道との関連のなかで、道路状遺構の検出に努めたが今回も確認することはできなかった。一里塚自体２塚一対で遺存している例は稀であり、近隣では牟礼村四ツ屋、信濃町野尻上ノ原に残っている。

今回の調査は仮設鉄塔の建設にともなうものであり、したがって調査面積は９ｍ四方という試掘的な調査であった。しかしながら区画整理地点の調査成果を多少なりとも補足することができたと思う。

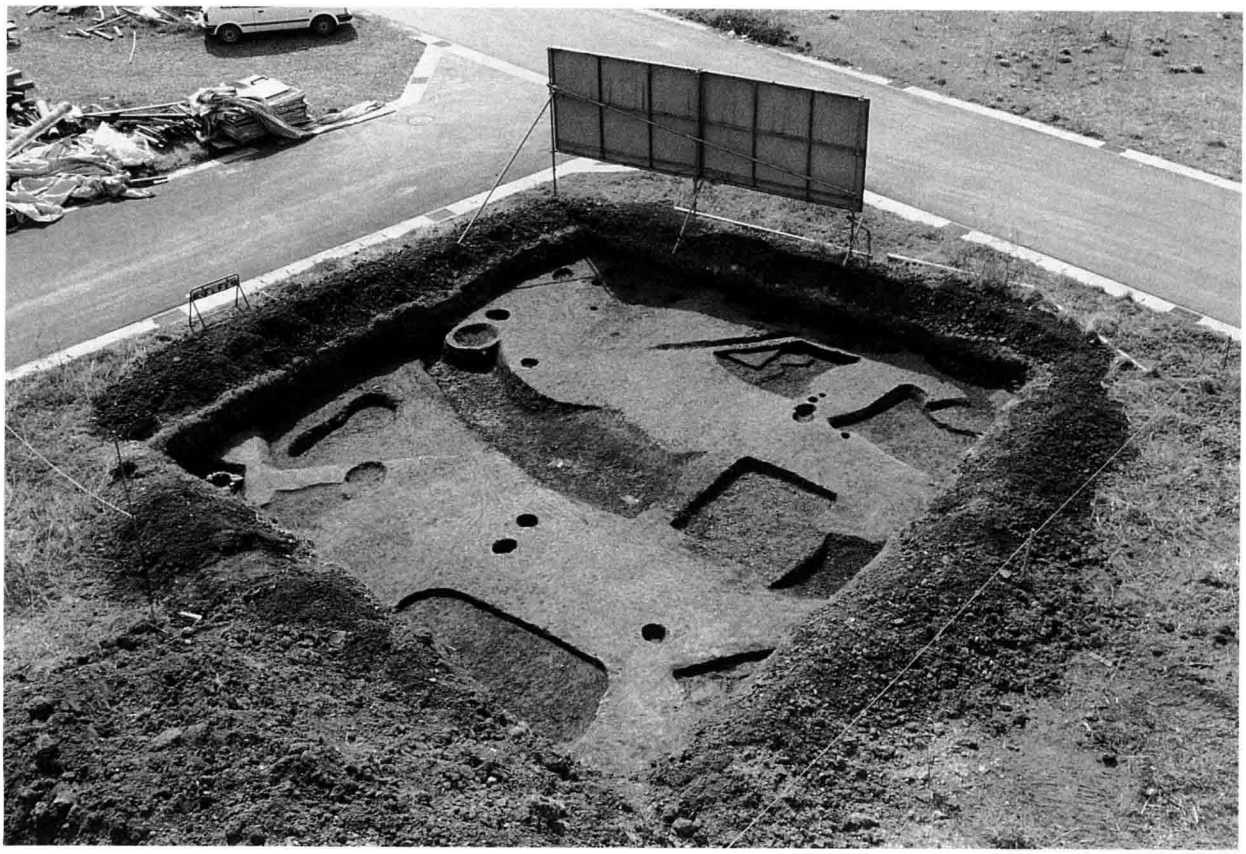

写真９　調査区全景（北西から）

浅川扇状地遺跡群

YOSHI－DA MACHI－HIGASHI SITE

吉田町東遺跡

吉田住宅分譲地造成工事にともなう

埋蔵文化財発掘調査報告書

1995．3

長野市教育委員会

Ⅰ　調査経過

1　調査に至る経過

吉田町東遺跡の所在する長野市吉田地区は閑静な住宅街であるが、主要道路の拡幅改良等により一段と市街化が進行している。このような情勢の中、㈱マツダより当該地の「開発行為に関する事前協議申出書」が平成６年４月21日付けで提出された。当教育委員会では周辺の状況を鑑み確認調査の実施が不可欠と判断し、同年５月23日試掘を実施したところ埋蔵文化財の良好な包蔵を確認した。その後、開発事業者である㈱マツダとの保護協議を実施する中で、埋蔵文化財への影響は排除できず、記録保存を目的とした発掘調査を実施することになった。

2　調査日誌抄

平成６年５月30日　快晴（調査員１名、作業員０名）
　重機による表土剥ぎ作業。31日まで。
６月１日　晴れ（調査員３名、作業員７名）
　器材搬入。テント設営。遺構検出作業。
６月２日　晴れ（調査員３名、作業員７名）
　遺構検出作業。検出遺構確定。
６月３日　快晴（調査員３名、作業員９名）
　遺構掘り下げ作業。SA３・４等写真撮影。
６月６日　快晴（調査員３名、作業員７名）
　SA１、SD１、SD３掘り下げ作業。
６月７日　晴れ（調査員３名、作業員９名）
　SA等遺構掘り下げ作業。SA１写真撮影。
６月８日　晴れ（調査員３名、作業員９名）
　調査区全景写真撮影。コーディックシステム測量。
　器材撤収作業。
６月９日　晴れ（調査員３名、作業員０名）
　測量図結線。遺物取り上げ作業。
　本日をもって現場における全ての作業を終了する。

調査期間	平成６年５月30日～６月９日（９日間）
延作業員数	48人
起因事業面積	1,244㎡（うち保護対象面積 233㎡）
実質調査面積	120㎡

写真10　作業風景(1)

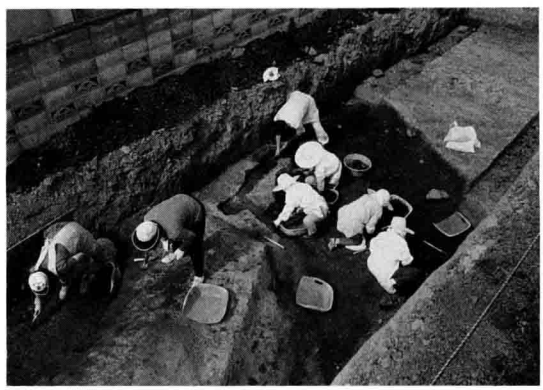
写真11　作業風景(2)

写真12　作業風景(3)

写真13　実測作業風景

II　調査成果

1　調査区の位置と地形

飯綱山を水源とする浅川は、中曽根集落のある山間部を侵食しながら流下し、通称「浅川原口」を起点として長野盆地内に流入し、東南方向へなだらかに傾斜する典型的な大規模扇状地を形成する。扇央の吉田・稲田を繋ぐ浅川他力橋辺りから天井川となり、さらに下流の通称「メガネ橋」ではJR信越線の上を長野電鉄線と平行に流れる。数年後さらにこの上をJR北陸新幹線、都市計画道路「東豊線」が通過する予定であることから、様々な幹線が集中する要所といえよう。調査区の所在する吉田地区はこの浅川扇状地の扇央部分にあたる。近年、市街地に程近い住宅街として発展し、幹線道路も整備され、北国街道添いの町屋風情は薄れつつある。

2　吉田地区の発掘調査歴

吉田地区における学術調査のメスは、昭和45年長野県長野吉田高等学校におけるプール建設工事にともなう多量の遺物出土により、「吉田高校グランド遺跡」の発見とともに弥生時代後期初頭の「吉田式土器」として形式設定されたことが第一刀となろう。発掘調査としては同じく吉田高校グランド遺跡にて昭和50年、長野市北部都市下水路事業にともなう第１次発掘調査が実施され、該期の竪穴住居跡７軒を確認している。翌51年には第２次発掘調査が実施された。また昭和60年には同校の体育館および格技室新築にともなう緊急発掘調査が実施され、該期の竪穴住居跡10軒が検出されている。その他には昭和62年に民間宅地造成事業にともなう浅川端遺跡が調査され、弥生時代中期、後期、古墳時代後期、奈良・平安時代の遺構が確認されている。また平成２年にも民間宅地造成事業による押鐘遺跡の発掘調査が実施され、平安時代を主体とする遺構を検出した。しかしながらいずれも長野市吉田地区の範囲内ではあるものの、旧吉田村（町）の中心地ではない。今回の民間宅地造成事業は吉田中心地で初めての発掘調査となる。

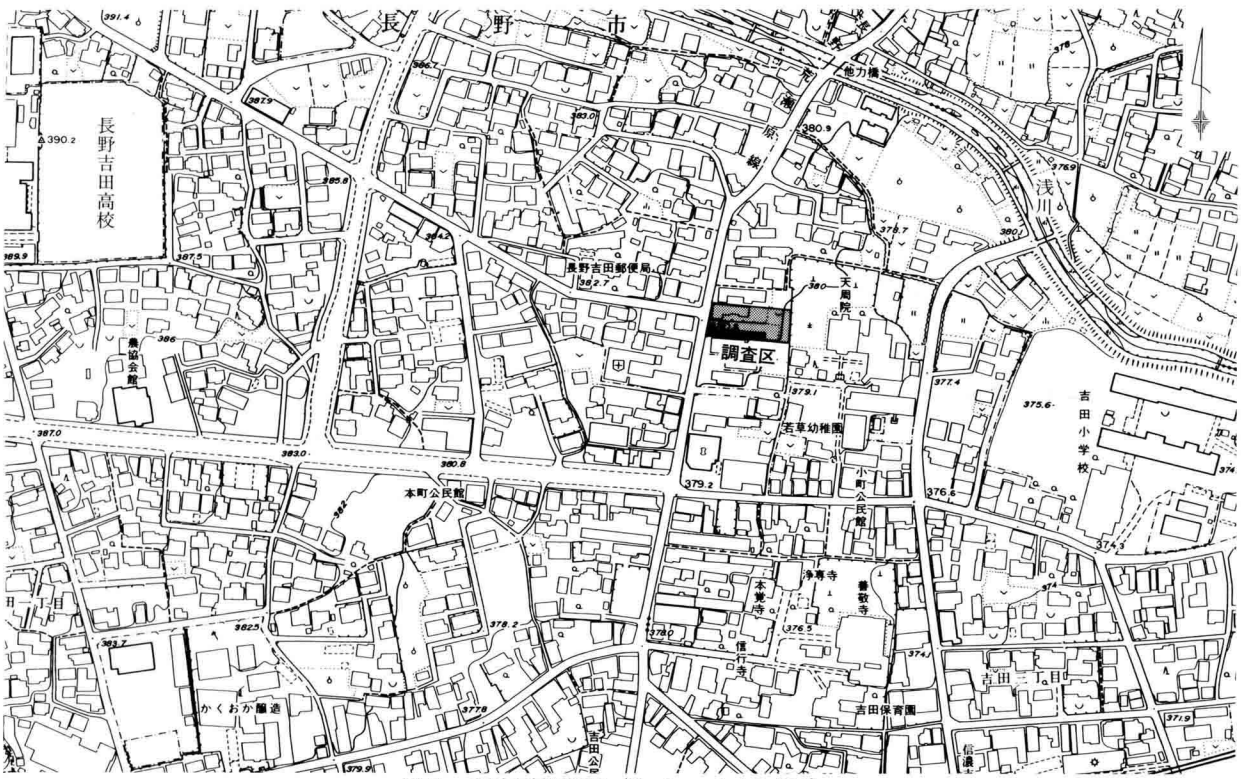

図７　調査区位置図（Scale＝１：5,000）

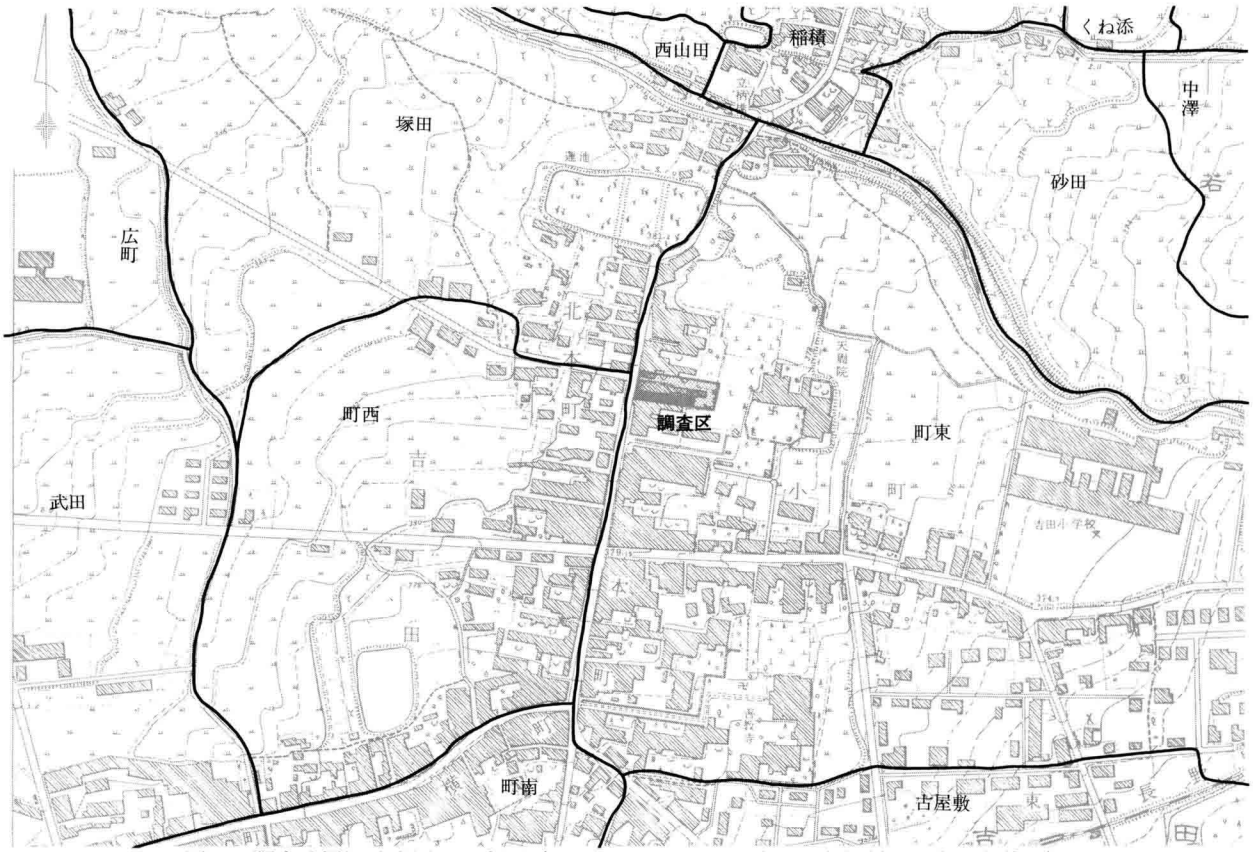

図８　調査地周辺地形図・旧字図（Scale＝１：5,000、大正15年測量・昭和27年修正）

図９　調査区位置図（Scale＝１：800）

3　遺構と遺物

調査区のある吉田北本町は、間口が狭く奥行のある町屋構造をした土地割りとなっており、起因開発事業はこの町屋構造の２区画をもとに新たに引込み道路を設定し宅地造成するものである。したがって調査範囲は、埋蔵文化財への影響が懸念される道路部分（233㎡）とし、その他の区域は現状保存とした。

平成６年５月23日に実施した試掘をともなう埋蔵文化財確認調査によれば、地表下約95cmより遺物包含層と考えられる黒灰褐色土層および土器片を確認し、また住居跡床面と思われる遺構（後のSA４）も検出している。

現地表下約125cmにて遺構検出面を設定し、大型重機によって表土を掘削した。検出した遺構は竪穴住居跡３軒、大溝跡２条、溝跡２条、土坑３基、小穴、攪乱等である。時代別では弥生時代後期の竪穴住居跡２軒、後期末から古墳時代初頭の大溝跡２条、平安時代の竪穴住居跡１軒が数えられる。このうち弥生時代後期末から古墳時代初頭の大溝跡２条は、あるいは一連の遺構としてとらえることも考慮すべきであり、仮に一辺14m前後の方形区画溝となる可能性も捨てきれるものではない。また遺構は確認できなかったが、検出面や後世の遺構埋土中より縄文時代中期の土器片が出土しており、近隣での該期遺構の存在を想定させる。また表土付近から掘り込まれた攪乱には中近世の町屋遺構の痕跡とも思われる土坑があったが、現代の「ゴミ穴」として使用されているものがほとんどで、詳細が判明するものはなかった。

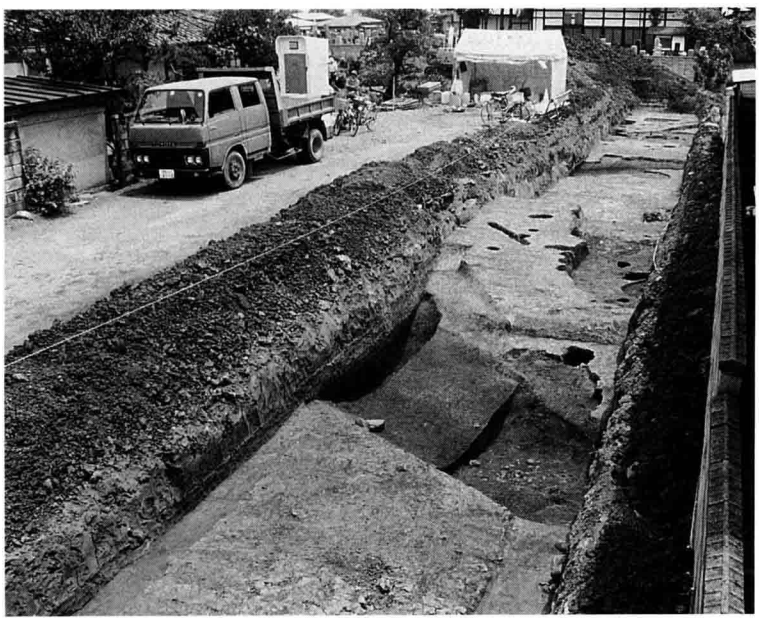

写真14　調査区全景（西から）

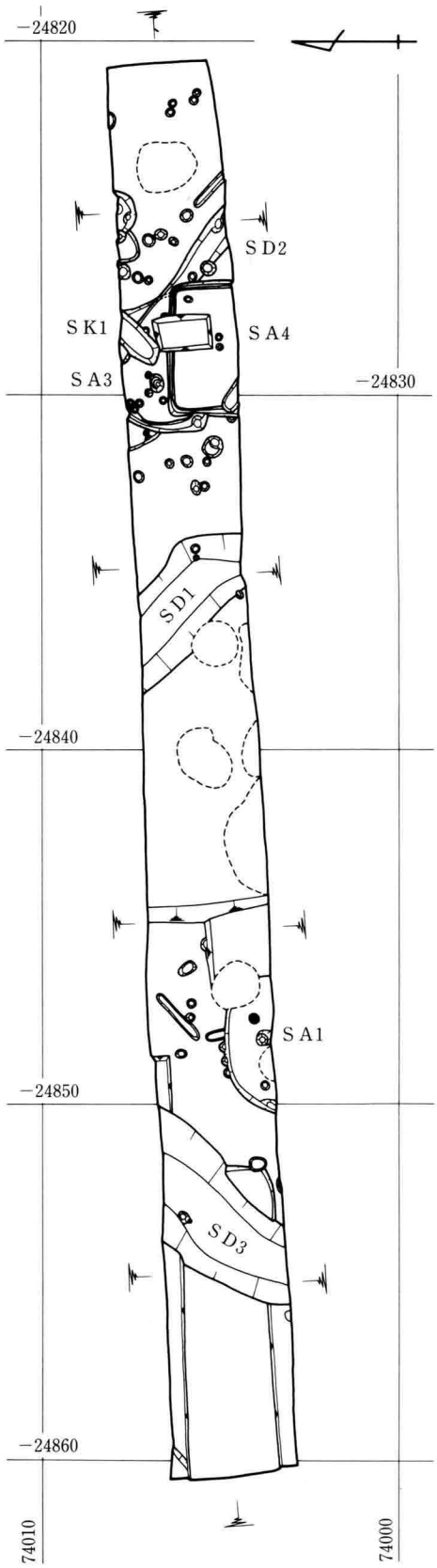

図10　調査区全体測量図
（Scale＝１：200）

(1) 竪穴住居跡

SA 1

南半部調査区外となるものの、幅約4.50m前後と推定される隅丸（長）方形と思われる竪穴住居跡である。東側を現代の井戸状攪乱等に切られ規模は明確でない。検出面からの床面の高さは27cmを測る。堅緻な床面は検出できなかった。炭化材の出土や住居壁面の焼土化等の状況から焼失住居である可能性が高いが、焼失住居にしては炭化材の出土量が少ない。調査区内での柱穴の検出は２基（Ｐ１・２）であるが、これ以外にも土坑を２基（Ｐ３・４）検出している。このうち柱穴Ｐ１とＰ２間にあるＰ４土坑は炉の痕跡であるかもしれない。縁部が若干酸化焼土化していた。

出土遺物量は多くなかったが、弥生時代後期の土器片が主体である。図化できるものは少なかったが、このうち赤色塗彩された高杯の杯部［図12・１、２］を図示した。石器では太型蛤刃石斧が２点出土している。図12の３は、刃部のみ磨いている石斧でＰ３土坑内より出土し、閃緑岩質の４は住居跡床面の炭化材直下より出土した。この他埋土中より縄文時代中期と平安時代、中世の土器片が混入・出土している。

住居の平面形態や柱穴の位置、出土遺物から弥生時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

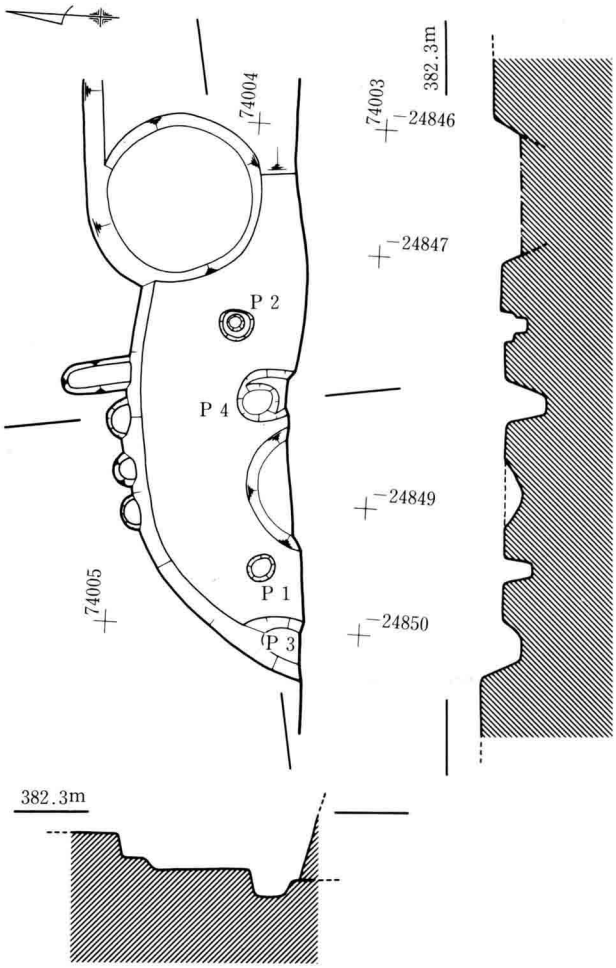

図11　SA１実測図

写真15　遺物検出状況

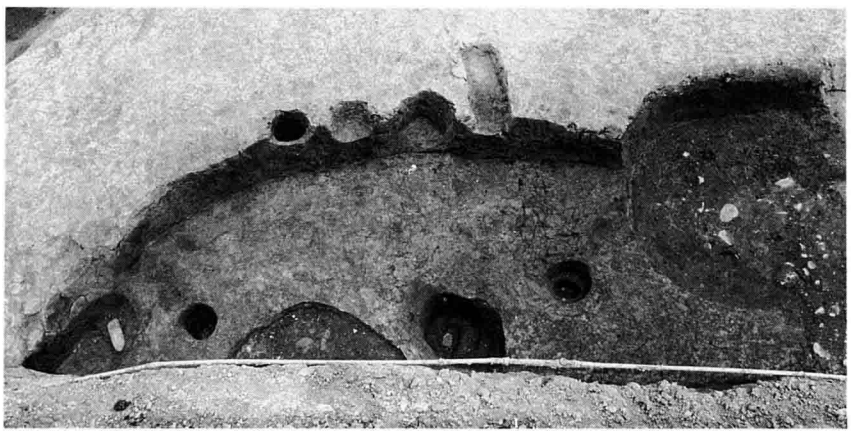
写真16　SA１全景

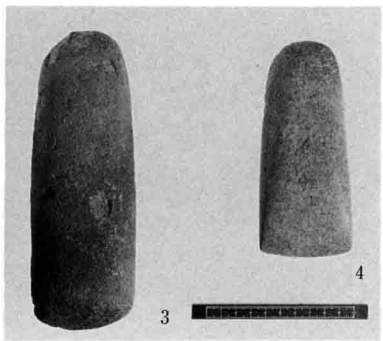

写真17　出土遺物写真

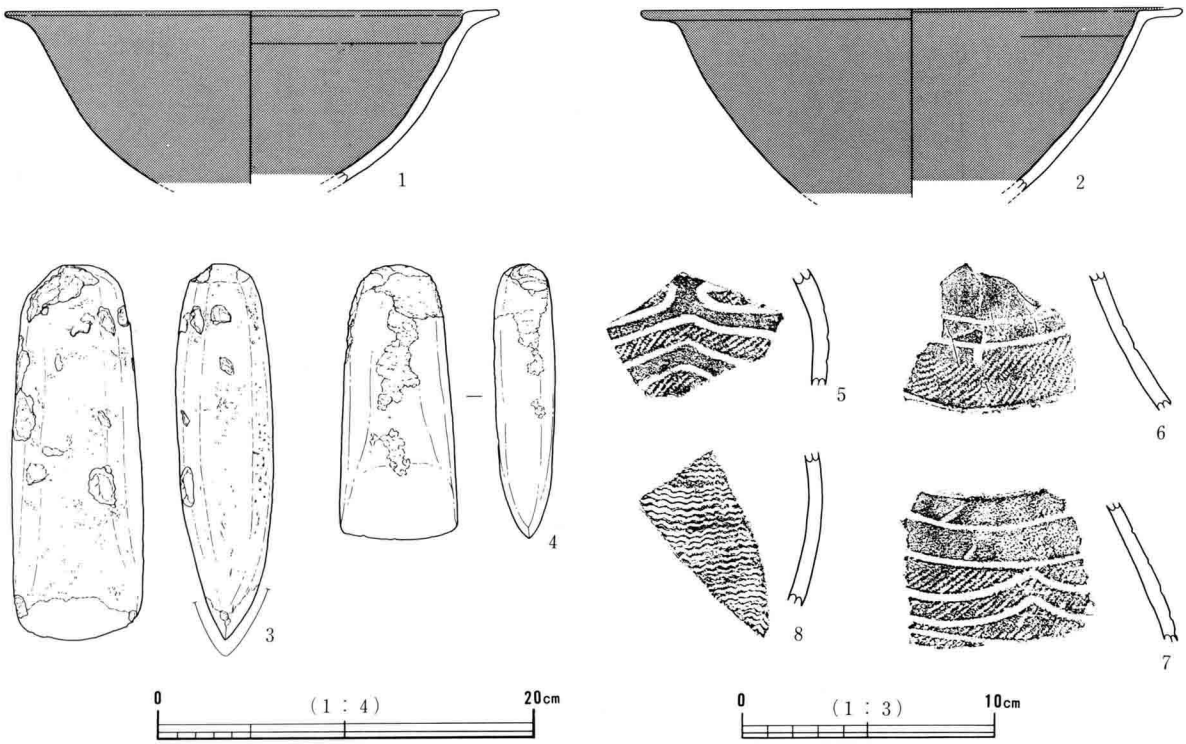

図12　SA 1 出土遺物実測図（S＝1：4、5～8は1：3）

SA 3

調査区東側において検出した遺構で、SA 4、SD 2、SK 1 等多くの遺構に切られほとんど残存していない。また当初もう1軒の竪穴住居跡（SA 2→欠番）の切合いを想定したため、その規模はさらに不明瞭となっている。このため出土遺物も小破片が主体で、その内容と壁溝の形態から弥生時代後期の隅丸長方形を呈する竪穴住居跡である可能性を示唆するにすぎない。

写真18　SA 3 全景

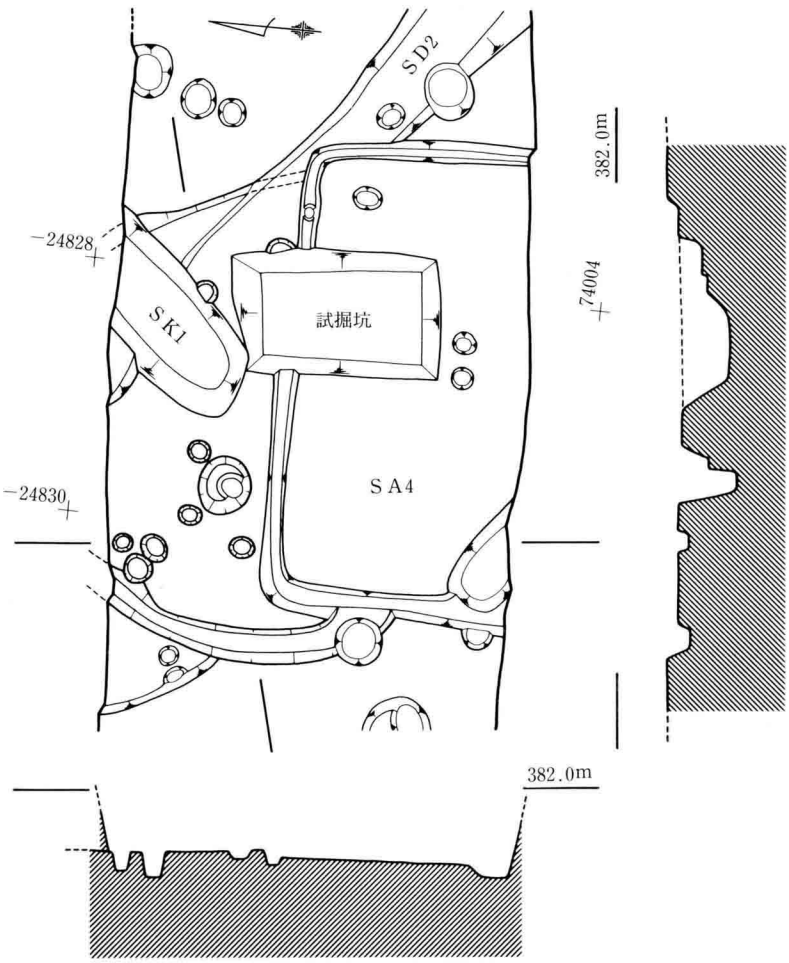

図13　SA 3 実測図（S＝1：60）

SA 4

確認調査時に検出した床面は当住居跡のものであり、南半を調査区外とするが、一辺約3.80mを測る方形の竪穴住居跡である。床面には薄い炭化物層が堆積していたが、堅緻な床面は確認できなかった。主軸方位をほぼ北に採っているが、カマドは調査区内では確認できなかった。

出土遺物は平安時代の土器片が主体で、うち土師器の杯［図15・1］、内黒処理された台付杯［2］、須恵器杯蓋［3］を図化した。

写真19　SA 3・4切合い状況

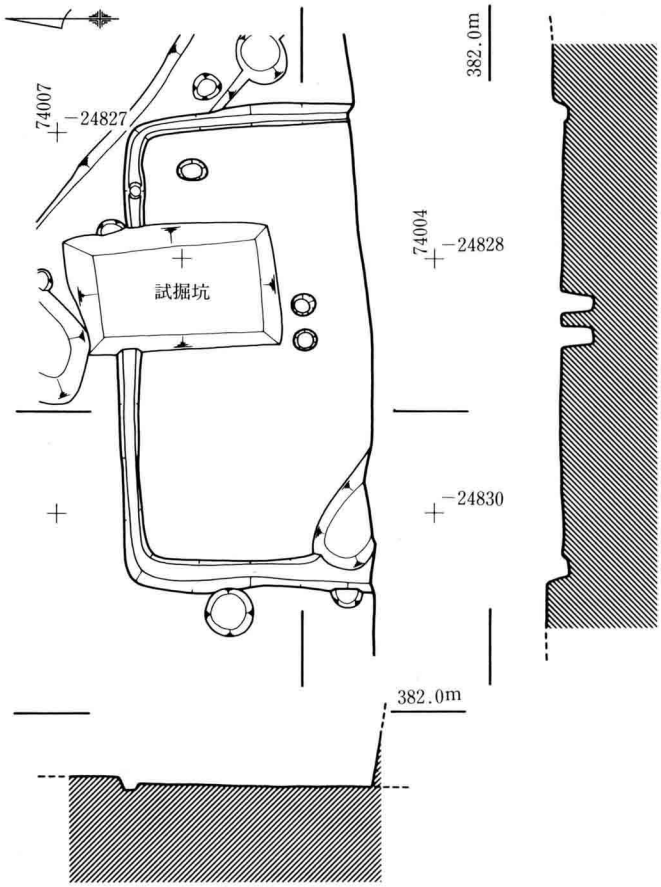

図14　SA 4実測図（S＝1：60）

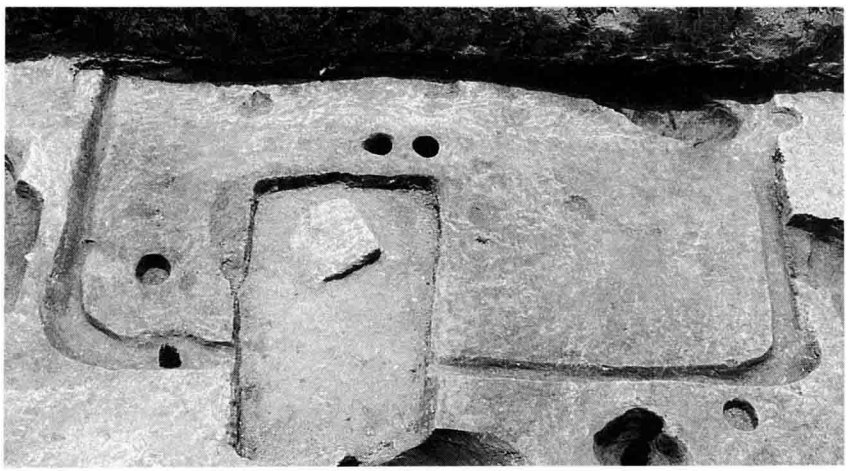

写真20　SA 4全景

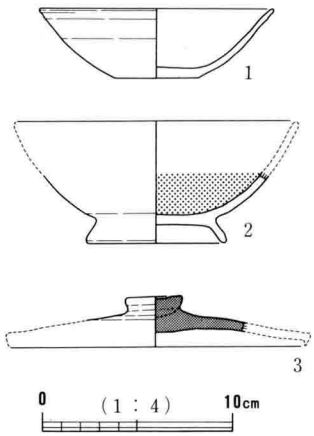

図15　SA 4出土遺物実測図（S＝1：4）

(2)　大溝跡

SD 1は幅2.20m、検出面からの深さ50cm、SD 3は幅2.80m、検出面からの深さ80cmを測る大溝であり、ともに断面逆台形を呈している。本書では大溝跡2条としたが、溝跡平面形から一連の遺構と推測して、一辺約14mの方形区画溝と考えることも不可能ではない。

出土遺物は弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器片が主体である。SD 1から出土した図16の1はS字状口縁台付甕の口縁部で、2は丁寧にミガキを施された高杯の杯部である。SD 3の19・20は土器片転用の円板状有孔土製品、21は赤色塗彩されたミニチュア土器である。

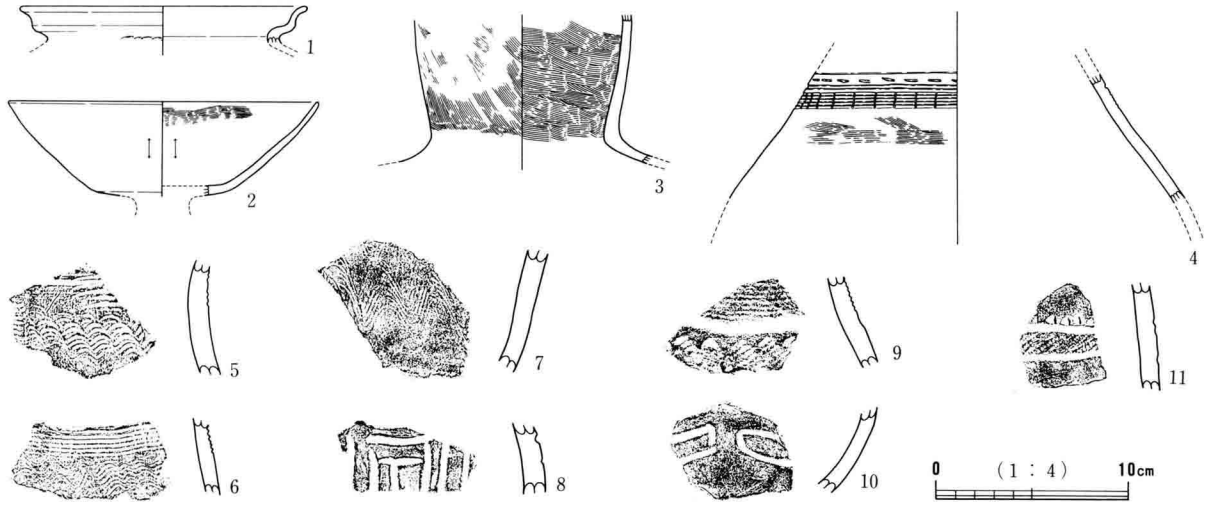

図16　SD１出土遺物実測図（S＝１：４、５～11は１：３）

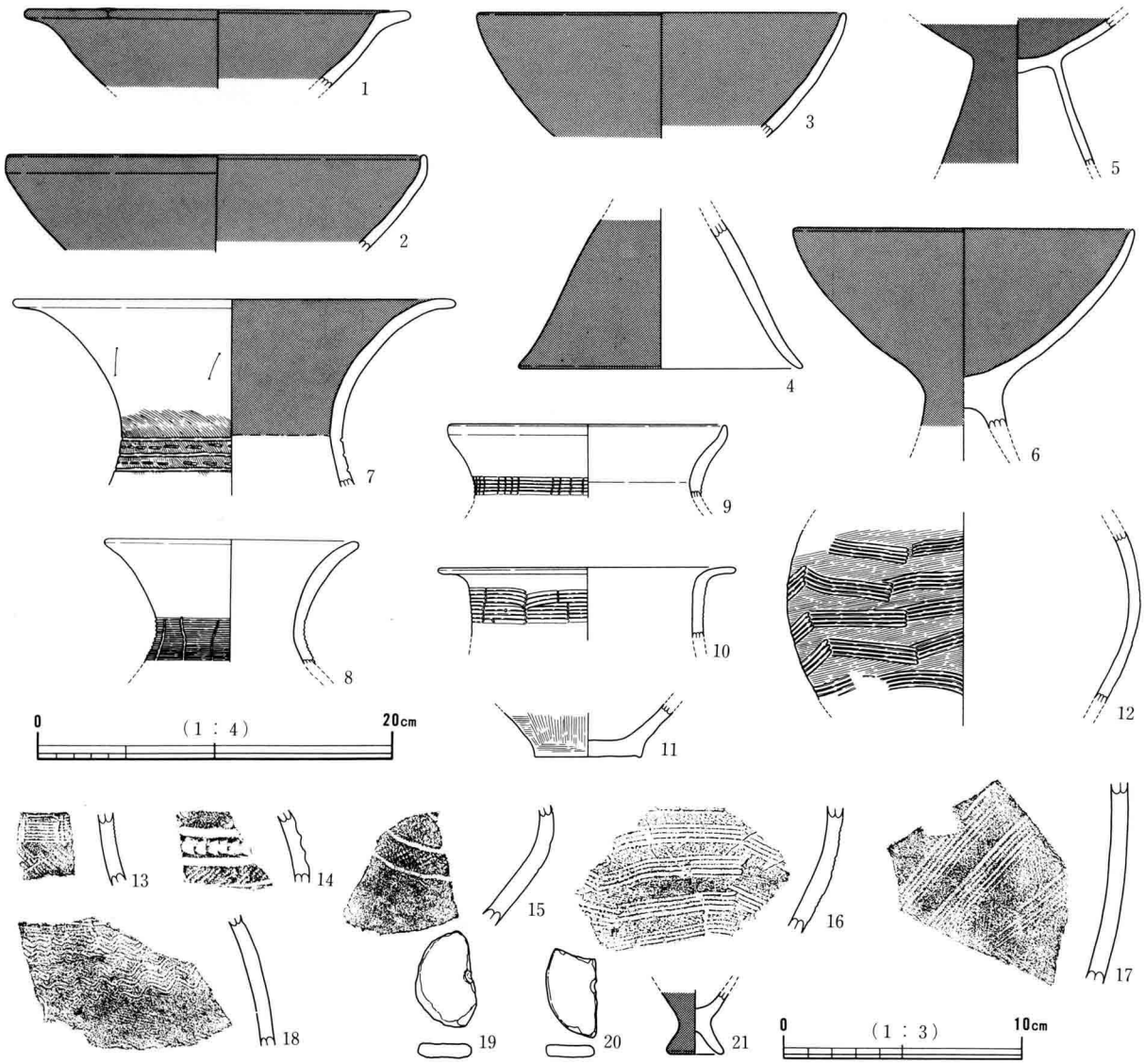

図17　SD３出土遺物実測図（S＝１：４、13～21は１：３）

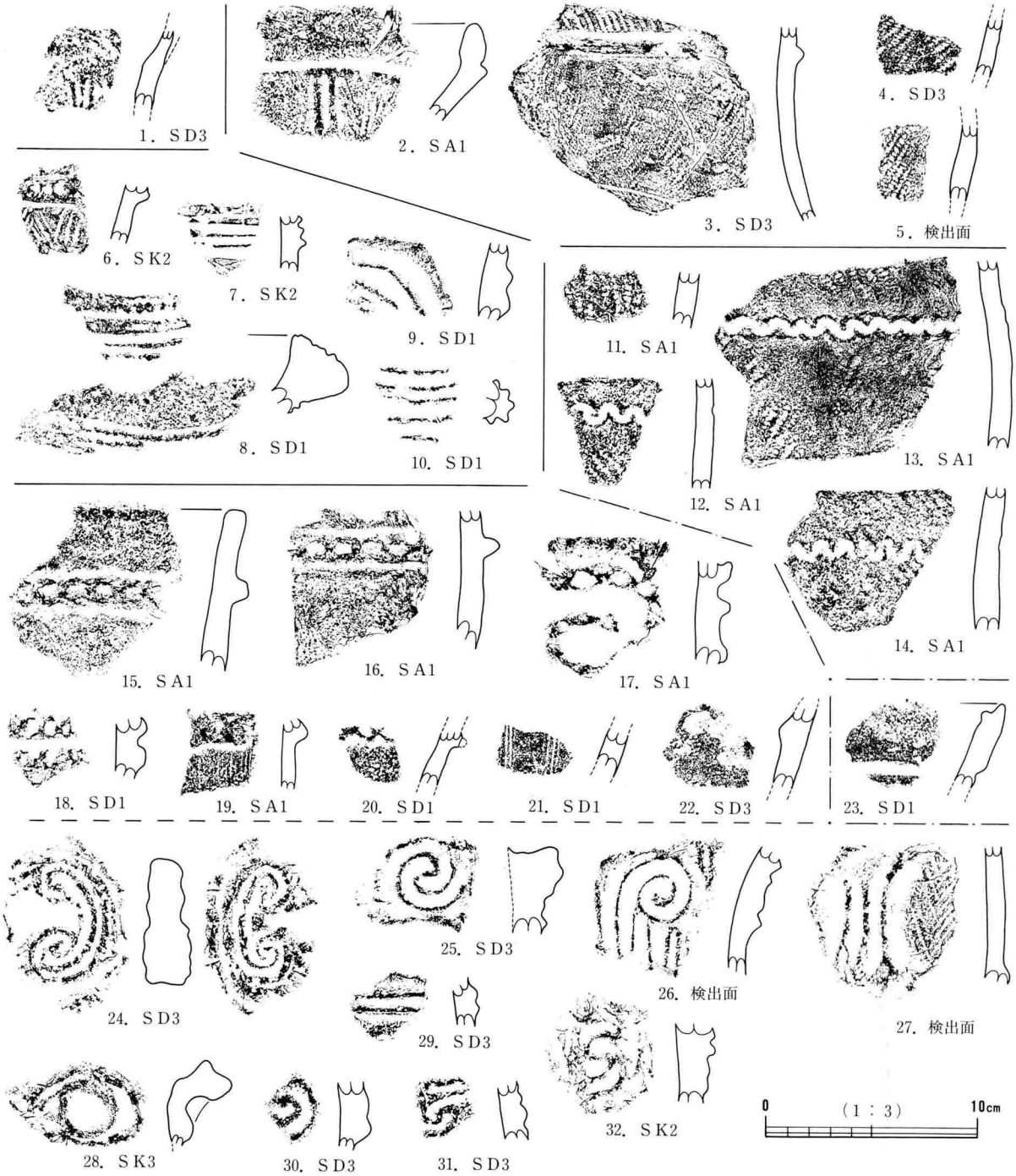

図18　吉田町東遺跡出土縄文土器拓影（S＝1：3）

(3) 縄文時代の遺物

本調査区において縄文時代中期の土器片が出土しているが、遺構に伴ったものは皆無で全て遺構の埋土か検出面である。多くが摩滅し流入品と思われるが、付近では該期の土器片が表面採集されており、近隣での遺構の検出は十分考えられるところである。土器片は前期的な様相を持つ1と、中期初頭と思われる一群［図18・2～5］、中葉と思われる一群［6～10］、中期後半と大きく4期に分かれ、さらに中期後半は4系統に概分できよう。11～14は縄文を縦方向に転がしコンパス文を施文する。15～22はいわゆる圧痕隆帯文土器と呼ばれる一群で、北信地方の土着土器群とされている。また23は関東系の土器片であろうか。

第Ⅲ章　小　結

調査区の所在する長野市吉田地区は、古くから北国街道に面した交通の要所に位置し、間口が狭く奥行のある町屋構造の面影を残す商業の盛んな土地柄であった。発掘調査においても中世遺物の出土も見られ、住宅密集地である町屋の特徴が表れているといえよう。今回の調査では大きく３時期の評価が与えられると思う。

遺構は確認できなかったが縄文時代中期の土器片が出土したことは、市街地における縄文遺構存在の傍証となる。調査中何度も脚を運んでいただき種々ご助言賜った、地元郷土史家長田長治氏の採集資料は最も有力な手がかりとなろう。土器片には綿田弘実氏の提唱する「圧痕隆帯文土器」が含まれ、北信地方土着土器群の分布に貴重な１点を提供する資料である（綿田1983）。竪穴住居跡を２軒検出した弥生時代後期は、吉田地区においては普遍的に採集される土器片の時期である。かつて吉田高校グランド遺跡出土土器の一群を、弥生時代後期初頭の「吉田式土器」として形式設定されたが、出土量が少ないながらも該期資料の蓄積の一部とできる。方形区画となる可能性を有すSD１・３は、その出土遺物から弥生時代最終末から古墳時代初頭に位置付けられ、あるいは方形周溝墓となる可能性も無視できない遺構である。SD１からのＳ字状口縁台付甕の口縁部［第16図・１］の出土は、該期の東海地方からの影響を考えさせる資料でもある。

長田氏の地道な調査では、吉田地区のあらゆる場所より土器片や石器を採集できるとのことである。またその採集地点はほぼ時代別に限定されるらしく、「町東」では弥生時代後期が主体であるという。また付近の通称「塚田耕地」には高塚系の古墳（蛇塚古墳、煙滅）も存在していたことから、縄文時代より中近世、そして現代へと人々の営みが連綿と継続していた地区といえよう。

《参考文献》 綿田弘実　1983 「北信地方における縄文中期後葉より後期初頭の土着土器」『須高』 第17号　須高郷土史研究会

写真21　調査区全景（西から）

写真22　調査区全景（東から）

報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん　ふたつみやいせき(に)　・　あさかわせんじょうちいせきぐん　よしだまちひがしいせき
書名	浅川扇状地遺跡群　二ツ宮遺跡(2)　・　浅川扇状地遺跡群　吉田町東遺跡
副書名	中部電力吉田柏原線仮設鉄塔建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書 吉田住宅分譲地造成工事にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第７１集
編著者名	飯島　哲也
編集機関	長野市教育委員会　長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒 381-22　長野県長野市小島田町１４１４番地　長野市立博物館内　Tel 0262-84-0004
発行年月日	１９９５（平成７）年３月３１日
印刷所	信毎書籍印刷株式会社　（〒381 長野市西和田470　Tel 0262-43-2105）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
ふたつみやいせき 二ツ宮遺跡 (2)	ながのけんながのしおおあざいなだ 長野県長野市大字稲田 あざきたはら 字北原1050番地	20201		36° 40′ 10″	138° 14′ 10″	19940418 ～ 19940422	m² 80	仮設鉄塔 建設
よしだまちひがし 吉田町東 遺跡	ながのけんながのしよしだ 長野県長野市吉田 ちょうめ ３丁目998番地　他			36° 40′ 05″	138° 13′ 20″	19940530 ～ 19940609	m² 120	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二ツ宮遺跡 (2)	集落跡	古墳時代中期 ～ 平安時代	竪穴住居跡　１軒 溝跡　２条 土坑　７基 性格不明遺構　２基 小穴　等	土師器 須恵器	
吉田町東 遺跡	集落跡	縄文時代 ～ 中世	竪穴住居跡　３軒 土坑　３基 大溝跡　２条 溝跡　２条 小穴　等 攪乱　等	縄文・弥生土器 土師器・須恵器 内耳土器片 石器・石製品 （太型蛤刃石斧）	

長野市の埋蔵文化財

1968年　第１集『信濃長原古墳群』
1976年　第２集『浅川西条』
1978年　第３集『中村遺跡』
　　第４集『塩崎遺跡群』
1979年　第５集『塩崎遺跡群(2)』
1980年　第６集『三輪遺跡－付水内坐一元神社遺跡』
　　第７集『田中沖遺跡』
　　第８集『篠ノ井遺跡群』
　　第９集『四ツ屋遺跡（第１～３次）・徳間遺跡・
　　塩崎遺跡群(3)』
1981年　第10集『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
　　第11集『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』
1982年　第12集『浅川扇状地遺跡群－牟礼バイパスＡ・Ｅ地点』
1983年　第13集『浅川扇状地遺跡群　迎田遺跡・川田条里的遺構・
　　石川条里的遺構』
1984年　第14集『石川条里的遺構(2)・上駒沢遺跡』
　　第15集『箱清水遺跡(2)』
1985年　第16集『石川条里的遺構(3)・(付上駒沢遺跡)』
1986年　第17集『浅川扇状地遺跡群－牟礼バイパスＢ・Ｃ・Ｄ地点』
　　第18集『塩崎遺跡群Ⅳ　市道松節－小田井神社地点遺跡』
1987年　第19集『土口将軍塚古墳　－重要遺跡確認緊急調査－』
　　第20集『三輪遺跡(2)』
　　第21集『芹田小学校遺跡』
　　第22集『長野吉田高校グランド遺跡』
1988年　第23集『横田遺跡群　富士宮遺跡』
　　第24集『塩崎遺跡群Ⅴ　殿屋敷遺跡』
　　第25集『小島柳原遺跡群　南川向遺跡』
　　第26集『東番場遺跡』
　　第27集『小柴見城跡』
　　第28集『宮崎遺跡』
　　第29集『浅川扇状地遺跡群　浅川端遺跡』
　　第30集『地附山古墳群』
　　第31集『町川田遺跡』
1989年　第32集『中条遺跡』
　　第33集『鶴前遺跡』
　　第34集『石川条里遺跡(4)』
　　第35集『篠ノ井遺跡群Ⅱ』
1990年　第36集『屋地遺跡Ⅱ』
　　第37集『篠ノ井遺跡群Ⅲ』
1991年　第38集『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』
　　第39集『塩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)』
　　第40集『松原遺跡』
　　第41集『小島柳原遺跡群　中俣遺跡・
　　浅川扇状地遺跡群　押鐘遺跡・檀田遺跡』
1992年　第42集『田中沖遺跡Ⅱ』
　　第43集『南宮遺跡』
　　第44集『塩崎遺跡群(7)』
　　第45集『石川条里遺跡(6)』
　　第46集『篠ノ井遺跡群(4)』
　　第47集『浅川扇状地遺跡群　二ツ宮遺跡・本堀遺跡・
　　柳田遺跡・稲添遺跡』（２分冊）
　　第48集『小島柳原遺跡群　中俣遺跡Ⅱ』
1993年　第49集『浅川扇状地遺跡群　三輪遺跡(4)』
　　第50集『浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡』
　　第51集『松原遺跡Ⅱ』
　　第52集『田牧居帰遺跡』
　　第53集『岩崎遺跡』
　　第54集『古町遺跡　流人塚』
　　第55集『浅川扇状地遺跡群　駒沢新町遺跡Ⅱ』
　　第56集『上見林遺跡』
　　第57集『石川条里遺跡(7)』
　　第58集『松原遺跡Ⅲ』
　　第59集『史跡　松代藩主真田家墓所』
1994年　第60集『猪平遺跡・宮ノ下遺跡』
　　第61集『栗田城跡(2)』
　　第62集『浅川扇状地遺跡群　三輪遺跡(5)・
　　小島柳原遺跡群　上中島遺跡』
　　第63集『松原遺跡Ⅳ』
　　第64集『小島柳原遺跡群　宮西遺跡』
　　第65集『浅川扇状地遺跡群　牟礼バイパスＢ地点遺跡(2)』
　　第66集『石川条里遺跡(8)』
1995年　第67集『浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡Ⅱ』
　　第68集『栗田城跡Ⅲ』
　　第69集『浅川扇状地遺跡群　徳間本堂原遺跡』
　　第70集『八幡田沖遺跡』

長野市の埋蔵文化財第71集

浅川扇状地遺跡群
二ツ宮遺跡(2)

浅川扇状地遺跡群
吉田町東遺跡

平成７年３月24日　印刷
平成７年３月31日　発行

編　集　長野市教育委員会
発　行　長野市埋蔵文化財センター

印　刷　信毎書籍印刷株式会社